

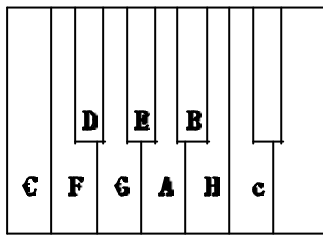
(b . 鍵盤)

Taste

楽 器	音 域	鍵 数
Piano	A ₂ ~ c ⁵	88
Cembalo	C D E ~ c ³	45
Portativ	h ~ f ³	31
"	f' ~ b ³	30
Positiv	C ~ f ³	54
Orgel Manual	C ~ g ³	56
Pedal	C ~ f'	30
" Manual	C ~ a ³	58
Pedal	C ~ g'	32
Romantische Orgel Manual	C ~ c ⁴	61
Pedal	C ~ g'	32

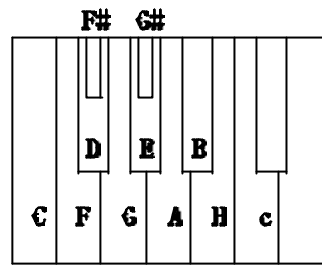
(歴史鍵盤)

(図 3)



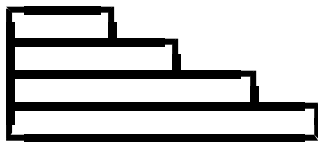
小8度鍵盤 Kurze Oktav

(図 4)



変形8度鍵盤 Gebrochne Oktav

(鍵盤構成) (図 5)



(鍵盤左側面図)

- 第4鍵盤 Kronwerk, Schwellwerk(Echo)
- 第3鍵盤 Schwellwerk, Brustwerk(Récit expressif)
- 第2鍵盤 Hauptwerk(Grand orgue)
- 第1鍵盤 Positiv(Positif)

(図 6)

後方支点型鍵盤



中間支点型鍵盤



参照(図3、4) 歴史鍵盤は、古い楽器の修復において、オリジナルの保持に重要だが、現代においては、新しい楽器製作に採用する事には問題が有り無意味な考えだと思う。しかし、一部の製作者は現在も製作を続けている。

参照(図5、6) 鍵盤構造は仏系、独系と異なる。後方支点型の鍵盤は仏系に多く、繊細な鍵盤タッチとなるが、譜面台の場所に制限がある。構造的に鍵盤の修理は簡単ではない。音楽的には最も良い構造とされている。他方、中間支点型の鍵盤は独系に多く、鍵盤のタッチはやや重くなるが、譜面台の場所は広く取れる。鍵盤の取り外しが簡単で修理し易く、多くの製作者が採用している。

機械式の鍵盤が最良だが、電気式の鍵盤も一部では使用されている。気動式の鍵盤は現在では稀である。電気気動併用の鍵盤は国内でも現存しているが、故障が多いのが現状である。しかし機械式であっても製作が悪く調整不備のオルガンがあり困った問題である。また、演奏時に耳障りな雑音が多く出る機械式オルガンもやはり問題だ。機械式構造の鍵盤を採用したからと言って良いオルガンになるとは限らない。